

哲学する本棚



期間: 令和4年1月15日(土)~3月13日(日)

会場: 石川県西田幾多郎記念哲学館 地下ホワイエ

「マスク／顔」ブックリスト

顔を隠す仮面

マスクは顔をおおって素顔や表情を隠す。みんながマスクをつけている世界はちょっとした仮装パーティーのようにも見える。仮面やお面をつけるってどういうことだろう？

1 『パパのしごとはわるものです』

作／棚橋雅弘 絵／吉田尚令 岩崎書店

こっそり親の職場についてきた男の子は、覆面レスラー「ゴキブリマスク」の正体が自分の父親だと知ってしまって…
悪役レスラーは悪者だけれど、レスラー本人はいいお父さんかもしれない。いい人でも、悪役の「マスク」をかぶれば悪者になる。それなら覆面レスラーの正体は「マスク」のほうかもしれない。

2 『真説・佐山サトル タイガーマスクと呼ばれた男』

田崎健太 集英社インターナショナル

覆面レスラーには、中身の人がいる。初代タイガーマスクは佐山サトルだった。二代目は三沢光晴だし、漫画原作では伊達直人だった。

3 『仮面の本 作って広がる貴方の世界』

白ふくろう舎 マガジンランド

思い切りゴージャスなデコレーションを施した仮面をかぶると、普段の私とは違う誰かになれる。この本では誰もが隠し持っている変身願望を叶える仮面の作り方と作品が紹介されている。
仮面をかぶって普段の私から自由になることで、かえって、本当の私に気付く、ということもあるかもしれない。

4 『能面の見かた』

監修／宇高通成 誠文堂新光社
編集／小林真理

能は能面という仮面を着ける仮面劇である。
「能面のような無表情の顔」という言い方があるけれども、演者が着けた面は様々な表情を見せる。中間表情から少し傾けて「曇らす」と憂いとなり、反対に面を上げると「照らす」といい、うれしい表情になる。

5 『面とペルソナ』

和辻哲郎 岩波書店

西田幾多郎の同僚でもあった和辻哲郎のエッセイ集。表題作「面とペルソナ」の中でお面について論じている。
「人格(person)」という語の元になっているギリシャ語「ペルソナ」はお面を意味した。「面目を立てる」「顔をつぶす」といった日本語にもあらわれている顔やお面の不思議。

6 『仮面の解釈学』

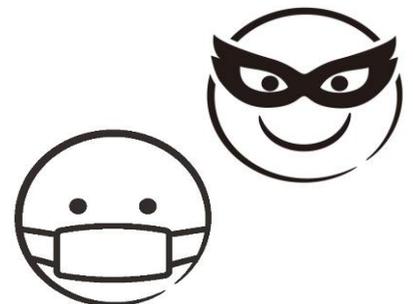
坂部恵 東京大学出版会

人は時と場合に応じてさまざまな仮面をもつ。とはいえ、その裏には変わらない自己同一的な私自身が、つまり「素顔」があると信じている。
坂部恵はこうした「素顔」信仰を近代人の病ととらえ、「仮面」の不思議なありように注目する。

7 『表と裏』

土居健郎 弘文堂

「オモテとウラ」は「顔と心」「建前と本音」を意味する。オモテ、つまり顔というものは本音を隠す覆面なのかもしれない。
有名な日本人論『「甘え」の構造』の続編。



マスクの下の素顔

マスクなしに顔と顔を突き合わせて話をする。この当たり前のことが今では珍しくなった。
顔って何だったのだろうか？

8 『ぼくのおじいちゃんのかお』

文／天野祐吉
写真／沼田早苗

福音館書店

おじいちゃんをよくわらう。
あんまりわらうと、ないてるみたいだ。
おじいちゃんのかおはおもしろい。

あ、またねてら。

9 『顔の現象学 見られることの権利』

鷲田清一

講談社

美容師かカメラマンでもなかったら、他人の顔をまじまじと見ることはめったにできない。しかし、かすめ見ることしかできないその顔のちよとした微笑みや揺らめきが、私をうろたえさせ、激しく動揺させる。
〈顔〉とはどのような現象なのだろうか。

10 『顔をなくした女 くわたり探しの精神病理』

大平健

岩波書店

表題作には精神科医の著者が担当した「顔がなくなった」という患者が登場する。マスクをつけたり、化粧をしたり、試行錯誤の治療プロセス。
「自分の顔がないと困りますか？」
「そりゃ困ります」
「どういう時に困るのでしょうか？」

11 『「顔」の進化 あなたの顔はどこからきたのか』

馬場悠男

講談社

人間の顔は他の動物から見るとかなり変なのかもしれない。
例えば犬から見れば、人間の鼻は変に下を向いていて息苦しそうだし、小さくて毛の生えていない耳はまったく動かないので何を考えているのか分からない。白目がむき出しになっているのも気持ちが悪く、かわいそうに口が引っ込んでいてエサが食べにくそうだ… どうして人間の顔はこんな顔なのだろうか。

12 『哲メン図鑑 顔からわかる哲学史』

文／梶辺勤
イラスト／高橋信雅

五月書房

哲学史が哲学者の顔からわかるなんてことはないけれど、印象的な顔を持つ哲学者は多い。顔全体が髭のようなマルクス。妙に額の広いカント… 哲学者の顔をうまく取り入れながら、それぞれの思想に関連した面白いイラストが描かれている。

13 『レヴィナス 「顔」と形而上学のはざままで』

佐藤義之

講談社

顔には何か力がある。たとえば、相手を殺そうと固く決意してナイフを振り上げた人も、その瞬間、相手の顔を見てしまったら、躊躇するのではないか。それは、相手が恐ろしい顔をしているからではない。むしろ、手も足も声も上げられない弱者のおびえる眼が、今なされようとしている道徳的な罪を告発するのである。
「顔」に道徳的責任の源泉を見るレヴィナスの思想。

14 『FACES いじめをこえて』

NHK「FACES」プロジェクト

株式会社KADOKAWA

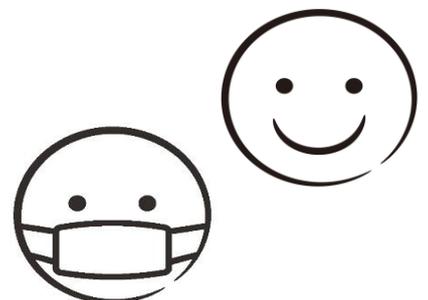
いじめでつらい思いをした人たちが、その体験をカメラに向かって語る。NHKと海外の報道機関の連携プロジェクト。
ただただ、カメラを見つめている顔は、私たちに何かを訴え、また、励ましているように見える。

15 『押し燃ゆ』

宇佐美りん

河出書房新社

「成美はリアルでもデジタルでも同じようにしゃべる。(中略)「最高でしょ」、スタンプみたいな屈託のない笑顔が言った。成美はアイコンを取り換えるように都度表情を変え、明快にしゃべる。建前や作りわらいではなく、自分をできるだけ単純化させているのだと思う。」
話題の芥川賞受賞作



表情と心の中の感情

表情が見えたら相手の心の中の気持ちが分かるかもしれない。けれども、感情を隠して、表情を作ることだってできる。
心と感情を考える。

- | | | |
|--|--------|---|
| 16 『きもち』
ぶん／谷川俊太郎
え／長新太 | 福音館書店 | この絵本では、登場人物たちがどんなきもちなのかは書かれていない。そもそも、ほとんど言葉がない。それなのに、シンプルに描かれたそれぞれの顔に、ふくざつな気持ちを読み取ってしまうのはどうしてだろう？ |
| 17 『表情』
廣松渉 | 弘文堂 | 表情というのは、内なる心的現象が、外の身体表面にあらわれたものだ、などといわれる。たしかに、実感的にはそういう体験もある。けれども理論的に考えるとどうなのだろうか？
「表情」を「哲学にとっての大問題の一つ」という廣松渉の論考。 |
| 18 「感情のある風景」
『諸星大二郎特選集第一集 男たちの風景』
諸星大二郎 | 小学館 | 「何なんです、あの、[人々の]そばに出たり消えたりしている妙な形のもの
は・・・」
「あれが感情なのだ。」
感情を心の中にはなく、心の外にもつ人が住む星にきた男の話。悲しみも喜びも、すべての感情が心の中から消え、誰もが見える形として外にあらわれる。それは救いなのか？ |
| 19 『悲しい本』
作／マイケル・ローゼン
絵／クエンティン・ブレイク
訳／谷川俊太郎 | あかね書房 | (肖像画を見ながら)
これは悲しんでいる私だ。
この絵では、幸せそうに見えるかもしれない。
じつは、悲しいのだが幸せなふりをしているのだ。
悲しく見えると、ひとに好かれないのではないかと思ってそうしているのだ。 |
| 20 『悲しい曲の何が悲しいのか
音楽美学と心の哲学』
源河亨 | 朝日出版社 | 音楽を聴くという体験について、心の哲学を用いて考えた著作。
普通、私たちは悲しみといったネガティブな感情を引き起こすものを避けようと生活している。それなのに、わざわざ悲しい曲を好んで聞く人たちがいるのはなぜだろう？ |
| 21 『MiND 心の哲学』
ジョン・R・サール | 講談社 | 心とは何か？
現代哲学に「心の哲学」と呼ばれる分野がある。本書はサールが、現代の心の哲学についての包括的な見取り図を描いた入門書であり、またサール自身の自説が展開されている。
「よく知られている理論、しかも影響力のある理論が、そもそも全部間違っているという点で、心の哲学は、哲学のなかでも類を見ないテーマである」 |
| 22 『心 哲学ははじめの一步(3)』
立正大学文学部哲学科 | 春風社 | ●「心はどこにあるのか」(村田純一)
心は脳の中にあるといわれたりする。けれども本当にそうか？
●「私の(私)との関係性」(金井淑子)
ありのままの自分になるの♪(Let It Go)。アナ雪現象から考える。
●「善悪は心の中にあるのか」(竹内聖一)
善悪の問題に正解はないのか？ かけ算と善悪の問題の違いは何か？
●「愛する」(田坂さつき)
片思い中の男子学生たちがギリシャ哲学を読みながら考える。 |
| 23 『はらわたが煮えくりかえる
情動の身体知覚説』
ジェシー・プリンツ | 勁草書房 | 感情とはなんだろうか？
それは内臓をはじめとする身体反応の知覚なのではないか？つまり、怒りははらわた(内臓)の反応なのかもしれない。
著者は情動理論における「身体説」と「認知説」を調停する理論として「身体性評価説」を提案している。 |
| 24 『きもちって、なに？ こども哲学』
オスカー・ブルニフィエ | 朝日出版社 | 「おとうさんとおかあさんが君を愛しているって、どうしてわかる？」
「ちゅーしてくれるから。」
「そうだね、でも・・・ちゅーしてくれたら、愛しているってこと？ 愛してたら、ちゅーばかりしてるの？」 |
| 25 『笑いの哲学』
木村覚 | 講談社 | 笑いとは何か？
ナイトやダウンタウンなど、現代日本のお笑いを題材に「笑い」について哲学的に考える。
それは、他者の不格好さを見て自己の優越を感じているのか(ホップズ)、出来合いの枠にはまった滑稽さを笑っているのか(ベルクソン)、不条理なもの・非常識と出会って常識が無に帰すことなのか(カント)。 |
| 26 『絵本 アランの幸福論』
著／アラン
訳／合田正人
画／田所真理子 | PHP研究所 | 幼子は幸福だから笑うのではない。むしろ私は、その子は笑うから幸福なのだといいたい。
上機嫌は第一の義務だという、アランの幸福論。 |

本当の私ってなに？

仮面が本当の私を覆い隠しているのなら、素顔が本当の私なのだろうか？
それとも、もっと別のどこかに本当の私がいるのだろうか？

27 『わたし かがくのとも傑作集』

ぶん／谷川俊太郎
え／長新太

福音館書店

わたし

おとこのこから みると おんなのこ
うちゅうじんから みると ちきゅうじん
おまわりさんから みると まいご？

28 『ぼくのニセモノをつくるには』

ヨシタケシンスケ

ブロンズ新社

ロボットに、自分のニセモノになってもらうために、自分のことを教えようとする男の子。
えーと・・・なにからおしえればいいかな・・・。
ぼくは、なんだろう？

29 『名前の哲学』

村岡晋一

講談社

あなたは誰かと聞かれたら、たとえば(幾多郎だったら)「私は西田幾多郎というものだ」と自分の名前を答えただろう。
当たり前なことだけれど、だからといって、〈私の名前〉が〈私〉であるわけではない。
名前とは何だろうか。

30 『「プライバシー」の哲学』

仲正昌樹

ソフトバンク クリエイティブ

日本語では、あまり他人に知られたくないし、知らせる必要もない私だけの秘密を「プライバシー」といったりする。また、仕事ではない個人的な案件が「プライベート」といわれることもある。こうした言葉遣いは原語の意味とはかなりずれているらしい。
プライバシーを思想的に振り返る。

31 『私とは何か 「個人」から「分人」へ』

平野啓一郎

講談社

「個人」という言葉は「分割できない」という意味らしい。けれども、旧友としゃべるときの私と職場での私が、分けた方がいらい別人、というのは変なことではない。
分割できない本当の私なんていないのかもしれない。
小説家が語る新しい人間観。

32 『ドーン』

平野啓一郎

講談社

人はただ1つの顔を持つのではなく、場面によって、相手によって、さまざまな顔、すなわちディブを持つ。平野啓一郎の分人(dividual)小説第一作。火星探査に成功した宇宙飛行士、佐野明日人。火星での秘密が大統領選挙に関わるスキャンダルを引き起こし…。監視カメラと顔認証技術が発達し、顔を変えられる可塑整形が実用化されている近未来を描く。

33 『和辻哲郎 人格から間柄へ』

宮川敬之

講談社

西田幾多郎の同僚、和辻哲郎は「人間」という言葉を吟味して、それは「人」とともに「世間」を意味していたのだという。
和辻によれば、人間は、父や子といった間柄とは無関係に、純粹な個人として存在するのではない。人間は間柄存在なのである。

34 『〈私〉の哲学を哲学する』

永井均 他

講談社

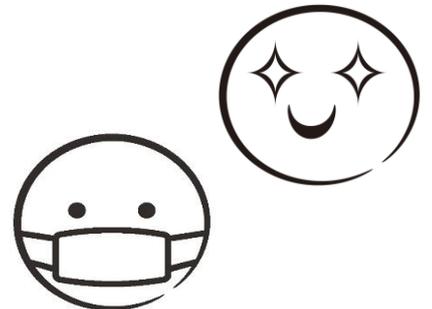
世界にこんなにたくさんの人がいる(し、これまでもいたし、これからもいるであろう)のに、なぜこの人が私なのか？
永井均はこうした〈私〉の問題を考え続けてきた。
3人の論者が永井本人と共に考える。

35 『自我の哲学史』

酒井潔

講談社

著者は、今日私たちが当たり前だと思っている「自我」概念は西洋近代の哲学のなかで形成されたものだという。だから、明治以降に輸入されたこの「自我」を私たちが生きるのは、少し無理があるのかもしれない。
「自我」という考え方が西洋近代哲学のなかでどのように形成されてきたのかを追跡する。



きれいならいいのか！

きれい、カッコいい、カワイイ。顔のよしあしを評価する言葉はたくさんある。
でも、もちろん顔だけでその人のことをはんだんするなんてできない。ルックス至上主義を考え直す。

36 『カッコイイってどういうこと？ Q～こどものための哲学』

NHK Eテレ「Q～こどものため
の哲学」制作班
ほるぷ出版

男の子がかがみを見ながら、ドライヤーで髪をセットしている。
「あーダメだー。カッコよくなりたいなあ。」

ところで、カッコイイってどういう状態なの？

37 『少女マンガのブサイク女子考』

トミヤマユキコ
左右社

少女マンガのヒロインは、たいてい、かわいい。けれどもブサイクなヒロイン
だっている。
美人が得で、ブサイクは損という単純な図式をはるかに超えて展開されるブ
サイク少女マンガの数々。

38 『「かわいい」のちから 実験で探るその心理』

入野野宏
化学同人

「かわいい」という言葉は、よく使われる。子犬や子猫、人間の赤ちゃんは典
型的に「かわいい」。けれども、時には一部の中年男性も「かわいい」といわ
れたりする。ブサかわいい、とかキモかわいい、といった変な言葉もある。
かわいいと感じる時、それはどんな感じなのだろう。
心理学の実験を通じて科学的に考える。

39 『「いき」の構造』

九鬼周造
岩波書店

「いき」とは「アカぬけして、ハリのある、色っぽさ」である。
主に江戸期の遊郭ではぐまれた人間関係とファッションの美意識である「い
き」。西田幾多郎の同僚、九鬼周造が留学中に学んだ最新のハイデガー哲
学を利用しながら論じている。

40 『形の哲学 見ることのテマトロジー』

加藤尚武
中央公論社

「あやめ」と「かきつばた」という美しい双子の姉妹と「私」の三角関係の恋愛
ドラマを通して「形を見る」ということを哲学的に考える。
私は妹のあやめを愛しているが、姉のかきつばたと見分けることができな
い。美しさとは形の美しさなのであり、妹と姉の姿かたちは同じなのだから、
私の愛するあやめの美しさはかきつばたの美しさであって…私はどうしたら
いいのだろう。

41 『キレイならいいのか ビューティ・バイアス』

デボラ L・ロード
垂紀書房

外見の美しさなどというものは、些細な問題のはずだ、と思いたい…けれど
も実際には、多くの人々は多大な犠牲を払いながら美を追求し続けている。
美の追求がどれほど大きな代償を伴うのか。私たちが美の追求へと突き動
かす圧力が何で、それにどうやって立ち向かえばいいのか。

42 『うつくしいとみにくい 哲学のおやつ』

ブリジット・ラベ
ミシェル・ピュエシュ
汐文社

おとぎ話の中のいじわるな魔女たちが美人だったことは一度もないし、もし美
人になっているとしたら、自分を親切な人に見せかけようとしているときだ。
でも、みんなわかってることだけど、うつくしさで親切さとはなんの関係もな
い。でも、だれかがなにか親切なことをすると、どうして「うつくしい行い」をし
たとかいうんだろう。

43 『特集=ルッキズムを考える 現代思想 2021年11月号』

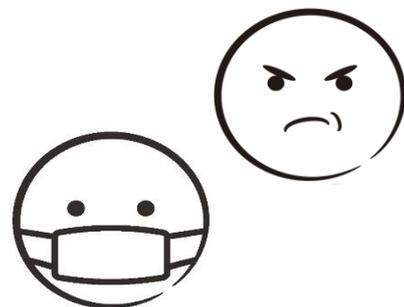
編／櫻田祐一郎
青土社

ブスって言われるのはもちろんイヤだ。だけど、「誰々さんは美人ね」って褒
められるのも、外見だけで判断されているみたいで傷つく。最近、日本ではこ
うした外見至上主義がよく「ルッキズム」という言葉で問題にされている。
もとの英語は、太っているなどの外見の良し悪しに応じて、雇用や昇進、収
入面での不利益を被るといった差別の問題を論じるために2000年頃からよく
使われてきた言葉。

44 『Wonder ワンダー』

R・J・パラシオ
ほるぷ出版

オーガスト・プルマンはふつうの男の子。ただし、顔以外は…。
生まれつき人と違う顔を持つ少年オーガスト。母と自宅学習をしていたが、
小学5年のとき、はじめて学校に通う。その外見のためにいじめられもする
が、彼の存在は徐々に学校の人々を変えていく。



どうして化粧をするのか？

街中で見かける顔が素顔とは限らない。ひげをそり、口紅を塗り、人は化粧をして顔を作る。
どうして、人間は化粧をしてよそおうのだろうか？

45 『なんでお母さんはけしょうをするの？ Q～こどものための哲学』

NHK Eテレ「Q～こどものため ほるぷ出版
の哲学」制作班

お母さんの化粧が終わらないから、映画を見に出かけられない！
「どうして、お母さんは化粧をするんだらう？」
「まわりの人に、きれいですね、って言われたいんだらう。」
「でも実際に、まわりの人にきれいって言われること、あるの？」
「ないな。それに、だれもお母さんのことなんか見てない。だって、映画を見に行くんだもん」

46 『お化粧しないは不良のはじまり』

山本桂子 講談社

「化粧をしない女学生はケシカラン」(百年前の某女子高校長)。名門女学生ほど化粧をした戦前。化粧品会社が全国の高校で「美容講座」を行った高度経済成長期。実は『JJ』から生まれたナチュラルメイク。明治から現代までの、個性的ではない化粧の歴史。

47 『化粧にみる日本文化 だれのためによそおうのか？』

平松隆円 水曜社

古代から日本の化粧の歴史をたどる。
『魏志倭人伝』や『古事記』『日本書紀』に見える赤いイレズミ。
平安貴族が白粉を取り入れ、それとともに髭剃りや、眉づくりが発達する。
戦で兜をかぶるために武士が始めたさかやき。当初は、剃刀ではなく、毛抜きで頭頂部全体の髪の毛を抜いたため、施術後は血まみれになったという。

48 『「カワイイ」はつくれる！ 変身メイク術』

砂糖きき 新星出版社

整形をしなくても、化粧だけでまるで別人のように変身することもできる。
「カワイイ」顔が、化粧によって作れるものなのだとしたら、人の顔っていったい何なんだらう。

49 「メイク」『マイクロ・エシックス』

川本隆史 他 昭和堂

女性はなぜ化粧するのだろうか。いわく「美しくあることは女の喜び」であり、だからこそ彼女たちはすすんで化粧に励むのだと、さしあたりは言えるかもしれない。
しかし、それは仕組まれた表面のイメージである。メイクの美の背面には、周囲の視線の思惑が、とぐろを巻きながらまとわりついている。

50 『正々堂々 私が好きな私で生きていいんだ』

西村宏堂 サンマーク出版
(ハイヒールをはいたお坊さん)

あるメイクアップアーティストのエッセイ集。
「はじめまして。西村宏堂です。／私は、僧侶で、メイクアップアーティストで、LGBTQの当事者です。／お坊さんとしてお経を唱えて、メイクもして、ハイヒールを履き、キラキラのイヤリングもつけて、同性愛者であると公言しています。」

51 『ファッションと哲学 16人の思想家から学ぶファッション論入門』

編／アネェス・ロカモラ フィルムアート社
アネケ・スメリク

資本主義批判で有名なマルクスは貧乏で、しばしばコートを買屋に入れた。しかし、コートなしで研究することもできなかった。なぜなら、大英図書館の読書室は、路上生活者—彼らはコートを着ていなかった—を受け入れなかったから。
マルクス、フロイト、メルロ＝ポンティ、ロラン・バルトなど。哲学者たちの理論を手掛かりに展開されるファッション論。

52 『奥行きをなくした顔の時代 イメージ化する身体、コスメ・自撮り・SNS』

米澤泉 馬場伸彦 晃洋書房

マスクがニューノーマルなって対面の顔は表情の半分を失った。顔全体を見るためには、むしろオンラインで会わなければいけない。
顔はもはや簡単に着替えられる。「ざわちん」のようにメイクをする必要すらないかもしれない。スマホで自撮りした写真をコスメアプリで「盛る」だけでいい。デジタル時代の「顔」を考える。

リストの本は、展示期間中は貸出できません。(3月17日から貸出)

